

末黒野

すぐろの

9月号 (通巻805号)



保線夫の黄

小川玉泉

保線夫の黄の装束や梅雨滂沱
梅花藻の花透く水の湧きつげり
到着の電車涼しき風を連れ
ラジオより正午の時報凌霄花

見飽きたる凌霄花筆の進まざる
陋屋を抜くる夕風墓の声
白と黄と交ることなく梅雨の蝶
老鶯の声山裾に雨催ひ
椎の葉にあふるる日差梅雨の明
とりたての青紫蘇を巻き握り飯
梅雨明けの朝風に鳴る雨戸かな
簾下げ東西の窓開け放つ

黴の底

松本三千夫

夏燕海へは出でず海平ら
凌霄や屋敷稻荷の太格子
江ノ電の風触れゆけり時計草
坂がかかる稲荷への道実梅落つ
山百合や百歩離れて水車小屋
山裾の草より青し雨蛙
森渡る風の湿りや桜桃忌
子は父の丈越えてをり今年竹
十代の日記文箱の黴の底
雲払ふ風は高みに街灼けて
暮れ泥む未央柳の金の糸
珈琲に馴染めぬ妻や五月雨

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

昼顔

田中臥石

望郷の胸にしみ入る夕蛙
鐘の音の籠る一山走り梅雨
家康の遺せし池や蓮浮葉
梅雨空や安房の棚田へダムの水
夏霧や牛十頭の咀嚼音
空低く智恵子碑に寄る卯波かな
青田道躡づきがくと膝頭
老いたりと思ふ日輪草を見つ
昼顔や海拔五米に住む
梅雨冷の晩酌熱き潮汁

夏初め

松田泰子

新緑や背中にあまるランドセル
たけのこを提げたる両手畦を来る
酔の匂ひする風通し青簾
てのひらに刃先そろりと冷奴
いそいそと買ひてかぶらず夏帽子
人待ちの肩に触るるや夏柳
かたまつてゐて鴨の子の間間かな
老鶯や少し濁りて露天風呂
昔ほど生家思はず露の雨
萍の隙なく山の影入れず



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



ヨット 森清堯

石楠花や足をとらるる奥社径
富士よりの風に皺みて代田水
日暈を背や泰山木の花
大寺の風鐸明けぬ柿若葉
山の日の傾き初めぬ朴散華
ヨットの綱さばくふなこの阿吽かな
青空へ向けて波切るヨットかな

囀 鮎 西川みほ

緑 雨 森清信子

風筋を見せ山藤の高さかな
風を知るほどになりたる青田かな
蹠を波のくすぐり磯あそび
たかぶれる瀬音や光る囀鮎
鮎を釣る長竿ゆるく撓ひけり
水脈重ね湖尻往き交ふ遊び船
いでたちの程には鮎の釣れてゐず

アーチ型の苔の石橋青田風
洋館の鎧戸開き薔薇の園
泉岳寺の井戸を浄むる緑雨かな
茜色際立つ入日五月逝く
二羽減りし軽鳧の子七羽水脈引いて
円描く小魚の群薄暑光
ささ濁る池を跳ねたり錦鯉

春惜しむ

吉田きみえ

滑 莧

岡田史女

母の忌の遅咲き躑躅花盛り
川沿ひに屋台の点り春祭
子の呉れし指輪のゆるみ春惜しむ
若葉時でこぼこ道の乳母車
校庭の池亀の子の甲羅干し
昼顔に潮風重し舟だまり
美容師の鉢自在や夕薄暑

柄振りして田植の近き棚田かな
水口の開け放ちあり蛇いちご
石一つ田の神とせり雨蛙
身の内のどこかが疼き滑莧
触れ太鼓梅雨めく雲を打ち払ひ
大寺や鉢に金魚の育ちをり
突端は折り返し駄梅雨の蝶

麦の秋

石黒興平

風の谷戸

岡野里子

ひとかどの尿の音の子馬かな
早乙女や畦弓なりの千枚田
麦秋の熟れ色深め大落暉
穀倉の土戸開かれ麦の秋
麦秋の焦げむばかりの入日かな
めまとひのひと群に会ふ暇かな
蔵町や屋根より高き山車の鉾

代掻きを始む真新の耕運機
綾なせる水田の面や風薫る
青鷺の水田一枚領しをり
薫風や泥田をせせる鳥の数
老鶯の一節長し風の谷戸
蜻蛉生れ濡れ羽ふるはす草の風
結葉や此処ゆ鳥獣保護区域

青炎集

小川玉泉選



横浜 上村光八

横浜 小沼えみ子

粽着く田舎の記事に包まれて

立ちのぼる香をとつくりと新茶波む

沈む日の茜に染まり白牡丹

水口に緑豊かや余り苗

香の溢れ色取り取りの薔薇の園

潤声と夏鶯や露天風呂

横浜 川村亘子

横浜 有賀鈴乃

葉桜や次に会ふこと無き別れ

海光る磴より望む濃紫陽花

夏潮や沖に白帆の五つ六つ

黒潮に揉まれし色や鯉の背

さ揺らぎもなき日の光朴の花

渡りゆく睡蓮の風きらめきて

寺家の里青葉若葉の風わたる

靴底に柔らかな畦里若葉

麦の秋放りしままの鋤と鋤

飛石の亀甲形や庭若葉

転びたる人を助けぬ五月晴

九十翁より一握のゆすらうめ

怪我癒えて叶ふ墓参や若葉風

梅雨じめり払ふ鼓や能舞台

能楽堂出で現世の七変化

均したる馬場散水のけづらへり

技競ふ馬の鼻息風薫る

木洩れ日や夏蝶低く去りやらず

亭亭と樟の神木若葉雨

高原の風や松蟬鳴き競ひ

つやかな牧の子牛や若葉風

青嵐や眼下の湖の深き碧

夏霧や深山霧島一面に

万緑を背に鎮もれる朱の宮居

横浜 前川美智子

流鏝馬のよき武者振りや富士桜

渋滞を抜けて湖畔の芝桜

境内の洄れぬ湧水藤の花

母の日やケーキ売場に下駄の僧

朝夕にしきりや谷戸の不如帰

風待ちのハングライダー緑さす

横浜 小倉純

大綱白里

亀卦川菊枝

横浜

岡本ヨシエ

東西に空分かつ尾根風薫る

石垣に落つる実桜城の址

先師逝く青梅雨につく鐘一打

樗散り川の暮色にまぎれけり

雲厚くけぶる相輪行々子

浴びにくる雀や梅雨の水溜

横浜

中山良子

横浜

渡辺絹代

群れ咲きて野川堤の花野蒜

団地の子野川に向きて草矢射る

対岸に届かず果つる草矢かな

降り出でぬ明治の杜の花菖蒲

雨煙る杜や葉陰の青蛙

町騒の車庫より発てり夏燕

植田はや水面に山の影映し

田舎家の戸棚の木目立葵

昼顔や木椅子握ゑある道親し

幼子の笑顔に揺れて小判草

置き物のごとく動かず梅雨の亀

風鈴や池の風くるそば処

耕 土 集

松本三千夫選



読み返すあぢさゐ寺の白陀師碑

宮城 門間としゑ

寡黙なる一途な農夫山背聴く

一日の歩数不足や梅雨寒く
蜜豆や寄れば話題の広がりて

競りに出る子牛の声や花胡桃

手のひらはやさしき器さくらんぼ
子のからだ回し祭りの帯むすぶ

万緑や髪染め上げて古希の朝

庭箒驚かしたり蟻の列

引き入れし沢田の水やえごの花

一二度の蹉跌がなんぞ浮いてこい

横浜 石井 勇

さくらんぼ分くる割算習ひたて

紫陽花や海へと続く御用邸
産土に立ちたる茅の輪瑞々し
斯くも深き別れの朝か海芋咲く

梅雨探し落人村へ一輛車

明神の祭囃子や街躍り

草笛や小諸古城の破れ築地

寺町の練堀小路桐の花

囲碁打つや幼に待つたする甚平

白魚や泳ぐは眼ばかりにて

中村 弘

苔の花見る影も無き五輪塔

青葉潮艦橋に足すくみをり
いかづちや海軍カレーほほぼりて
公園に人気なき日や花菖蒲

木洩れ日の光る水面や風薫る

蚕豆や茹で加減みる二つ三つ

気恥かし席譲らるる梅雨のバス

老鶯も母もふるさとなまりかな

虚子の墓へ訪ふ小径竹落葉

長田 厚子

塩川 君子

向佐 幸子